

KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

神田日勝記念美術館だより



「室内風景」1970年 北海道立近代美術館蔵



KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART
神田日勝記念美術館

〒081-0292 北海道河東郡鹿追町東町3丁目2 TEL.0156-66-1555

<http://kandanissho.com/>

2014.3.31

31

「開館二十周年を迎えて」



神田日勝記念美術館長
菅 訓 章

神田日勝記念美術館が開館二十周年を迎え、記念式の翌日に五十万人目の入館者を迎えた。NHK「日曜美術館」の放映は新たに大きな反響を呼んだことも特筆される。北海道における個人名を冠した美術館の先駆けとしてこの意義のある節目に立ち会えたことに深い感慨を覚える。思えば故藤本英夫氏の「小博物館論」を頼りに地域に根ざした美術館の建設運動が展開され、市街地の中心に立地することでも市民との事業連携が容易になったことも、今日の確固たる地歩を築けたものである。また北海道を代表する小説家である高橋揆一郎、小檜山博両氏を館長に招聘することで、知名度のみならず、館の羅針盤として方向性の提示と、特色ある事業が生み出されたことも忘れられない。ただ時代の変化は着実に進んでいる。建設運動を知らない世代が明日の美術館の担い手になりつつある。何を継承していくのか、何を新しく展開していくのか、峻険な道はこれから続いていく。

美術館のあるまち

「地元で親しまれる施設に」

笠岡市立竹喬美術館長 上 蘭 四 郎



開館二十周年を迎えた日勝館は、本年度中に入館者総数が五十万人を数えるという。人口六〇〇〇人弱の町の美術館に、これほど多くの方が訪れたのは驚きであり、日勝絵画の訴求力のすごさがうかがわれる。

去る六月二十八日、竹喬美術館友の会会員十二人に同行して鹿追を再び訪ねた。私は日勝館に対して、個人名を冠する美術館として、かね

てより親しみを感じ、何よりも市民運動により設立され、今日に至っても設立意思を継承する有志によって支えられているという点に敬意を抱いてきた。

竹喬館は昨年開館二十周年を迎え、友の会は本年設立二十周年を迎えようとしている。地方の個人美術館として、いかに将来を展望すべきか議論を始めたところであり、このたびの訪問は時宜を得ていた。

会員の多くは、代表作「室内風景」に執拗（しつよう）な空間表現の魅力を感じたであろう。「馬（絶筆・未完）」は土着性に満ちた野太い画風の内に、飼馬への掛け替えのない愛着を認めたであろう。それは哀感に満ち、深い感情移入をもたらすものであったようだ。

私は小規模な個人美術館は、絶えず地元で支えられて成長していくと考えている。両館がどこによって立つ美術館であるかを忘れることなく、世界に向けて発信し続ける美術館でありたいと願う。何より地元の方々に「日勝館」「竹喬館」と親しみをもって呼ばれ続けたいと思う。



「神田日勝記念美術館二十年の歩みと展望」

北海道立帯広美術館 学芸課長 鎌田 享



「美術館は役に立つのか」。神田日勝記念美術館に限らず、常に言われる言葉だ。スペイン北部の港湾都市ビルバオはかつて貿易業や鉄鋼業で栄えたが、一九八〇年代に深刻な不況にあえく。しかし九十七年、世界的美術館「グッゲンハイム・ビルバオ」の開館を機に、一大観光地として経済復興を果たした。

美術館が経済を活性化したモデルとされるが、ことさらに喧伝(けんでん)されるのは、裏返せばこの成功がまれな例であることを示している。

美術館が短期間に地域経済に寄与することは、至難の道だ。しかし、地域のシンボルとなり、精神的支柱としてコミュニティを支えることはできる。神田日勝記念美術館はそのことを証明している。

日勝は鹿追の大地で農民として日々を送った。そして画家として、地域や時代を超えた創造活動を行った。その生き方は、現在の住人に、土地への誇りとそこで暮らすしるべとを、提示してくれる。館名にある「記念」の語からは、日勝個人への「顕彰」とともに、この町の新たな「記念碑」たらんとする意思を感じるのである。

記念碑を建てることはいくばくかの資金と熱意があれば、存外できる。本当に難しいのは、その意義を後代まで伝え広げていくことである。この点でも、同館の活動は特筆に値する。特別展「一九七〇年代の美術」(二〇〇九年)では、日勝を同時代の北海道の美術動向に位置づけた。開催中の「室内における人間像」では、戦後日本のリアリズム絵画の系譜に位置づけようと試みている。

不断の取り組みがあつてこそ、画家と美術館は、一層の存在意義を得て、不変の輝きを放つのである。

北の大地に暮らす男女を、鮮やかにエネルギーに描いた「人間B」。あたかもこの作品のように、神田日勝記念美術館は、現代日本における美術館のひとつの理想像を、雄々しく示してくれる。

美術館人として、大いなる称賛と幾ばくかの羨望(せんぼう)を込めて、活動を注視している。

※(北海道新聞 朝刊 二〇一三年七月七日記事より転載)



「人間B」1969年

開館二十周年記念式

八月二十五日 鹿追町民ホール



式典は馬耕忌と併せて開催され感謝状の贈呈者を代表して、小檜山氏が「日勝の絵は土の匂いを嗅いだことのある人しか描けない」と述べました。

入館者
50万人達成
8月27日(火)



東京大田区在住の島中純さんに入館50万人目として菅館長が記念品を贈呈。

島中さんは友人3人と来館、35年前にテレビ番組で日勝作品を見て衝撃を受けたといい、「ずっと美術館を訪問したいと思っていた、節目に来られたのは、日勝さんに呼ばれたからかな。」と語っていました。

開館二十周年記念

特別企画展

室内における人間像とその空間と存在 — 神田日勝の「室内風景」の肉奥へ —

六月二十六日(水)～八月二十五日(日)
神田日勝記念美術館 「入館者数」 三二二一名

はじめに「神田日勝と『密室の絵画』について

1993年の「芸術新潮」に掲載された河原温の『浴室』シリーズにおける空間表現と、神田日勝の『室内風景』の新聞紙で覆われた室内の近似性については、かねてより指摘がされてきました。閉鎖された空間の中で展開される人間の姿は、河原温作品では時間軸による人間の一生の変容があり、日勝作品では新聞という情報化社会を象徴する空間の中にしゃがむ男という表象があります。これら二つの作品に共通するのは、そこにひそむ人間の精神の奥を見透かすような迫力があることです。

『浴室』シリーズは28枚に渡る素描で、人間の生死と存在を時間を超えてとらえており、空間はゆがみ人間は断片化し、無機質な物質のようになっていきます。今回展示する『孕(はら)んだ女』は、この主題を一点の作品に凝縮したものといえます。

神田日勝と時代との関連

1970年の第38回独立展に遺作として出品された『室内風景』は、詩人・宗左近により、その衝撃が雑誌「時代」に発表され、画業評価の端緒となりました。

1978年には北海道立近代美術館と東京の小田急グランドギャラリーで代表作を網羅した『神田日勝の世界』が開催されました。

これ以降の日勝の評価を顧み

ると、1992年に『日本のリアリズム1920s-1950s』で中谷泰や曹良奎とともに『馬』、『ミ箱』、『人』が、95年には『戦後文化の軌跡』1945-1995』に『室内風景』がポストモダンの時代の作品とともに展示されました。2012年に当館の『神田日勝と新具象の画家たち』では、具象絵画の系譜で北海道における新具象の画家を通過し、日勝の画業への新たな視界の構築をめざしました。

神田日勝が生きた時代とリアリズムについて

1946年から約4年に渡り、中央ではリアリズム論争が巻き起こっていました。これはリアリズムの定義と美術の在り方に関する誌上論争で、美術評論家を中心に「見たままに描く」ことを近代絵画のリアリズムの出发点にすべきというものと、前衛的な絵画全般を広義に現代のリアリズムとして包括するものとの対立で、和解することなく論争は終結しますが、後に『ルポルターシュ絵画』や『密室の絵画』などの現実社会に真正面から立ち向かったり、混沌とした世界や社会の暗部を鋭く突いたような作品を描く作家が現



小山田 二郎「鳥女」1961年 * T

鶴岡政男「重い手」1949年 * T

池田龍雄「倉庫」1957年 * T



『室内風景』 1968年 *H



『飯場の風景』 1963年

れました。同時代の動きの中で、もう一つ重要なものは(アンフォルメル)です。これは1956年の《世界・今日の美術展》で紹介された非定形の抽象絵画で、激しい筆致と厚塗りの粗い質感が特色でした。翌年読売アンデパンダン展でその影響が現れ、多くの作家が具象から抽象へと追随していきました。

この流れの中で、日勝は1968年から翌年にかけて厚塗りで流動的な画風で集中的に制作しますが、同時に克明描写による作品も描いていました。70年の『室内風景』では厚塗り表現を払拭して、一つの集大成となる造形表現へと到達します。

日勝の狭い空間表現は、遠近法を否定しつつ、前衛的な美術潮流の動きにも呼応したもので、いえませんが、それだけではなく、1962年の『人』など既に関から比較的狭い空間表現が用いられており、部分から全体へとイメージを拡げていく独特の創作方法とともに、日勝の独自性を示しています。

神田日勝の作品の空間表現の独自性について

最後に日勝作品の空間表現、奥行きについて考察します。

人物でも、動物やモノであつても彼の描く作品の奥行きは狭いのが特徴です。『ミ箱』は、背後の壁と手前の地面の間にあるドラム缶や『ミ箱』などがわずかな空間の中に置かれており、描き方はややキュビスム風です。『飯場の風景』でも、男たちが休息をとる飯場の室内を、やや俯瞰的な構図で捉えています。床と壁はまっすぐにつながら、左右の男は異なる角度からの視点で先ほどと同様の多視点の構図になっています。

この2点に限らず、限られた空間に平面性の強いモチーフを貼り付けるように配置し、手前から奥へと向かう遠近法ではなく、むしろこちらに向かって人物

やモノが迫ってくるような空間表現になっています。

新具象の流れは(密室の絵画)の作家たちとも重なり、社会や人間の暗部を凝視し、人間存在への鋭い視線を持っていきます。同様の表現傾向の日勝は、さらに新たな具象絵画の可能性を追求し、事物や人間の本質とは何かを見定めようとしていたと思われまふ。

結びに

本展は、神田日勝と(密室の絵画)の作品群との比較が中心ですが、1950年代から70年代にかけての美術潮流を概観するため、朝妻治郎・市原英樹・井上長三郎・大沼映夫・奥谷博・木村光佑・田口安男・由村文雄・野田哲也・三尾公三の作品も「室内における人間像」という主題で紹介します。これは、生活空間である室内の個としての人間、家族、恋人など、閉鎖空間における人間の状況や感情、精神状態など、さまざまなドラマが見え隠れしています。

神田日勝の画業を日本美術史の中に敷衍(かえん)してみることとは、一人の画家の生き方、画家として何を追求していたのかを考えると、決して時代や社会と無縁ではなく、また彼が具象



井上長三郎『休憩』 1967年 * T



野田哲也『日記』 1968年5月15日 1968年 * T

絵画の流れの中で、新具象からさらに先を見据え、新たな可能性を探っていたことを示唆してくれます。人間存在の確かさ、怖さ、そしてそれは観る者にも跳ね返ってくる力を持っていることを強く感じることが出来ます。

金澤 恵子(神田日勝記念美術館学芸員)

※特別企画展「アンフォルメル」より転載

*Hは北海道立近代美術館

*Tは東京都現代美術館所蔵作品

室内楽の夕べ

7月27日 [参加者数]55名



『室内風景』にちなみ北海道教育大学の南聡氏の企画により展示室内でフルート・ピアノ・ソプラノによりR・シュトラウス等の名曲が奏でられました。

美術講話

7月19日 [参加者数]15名



河原温の『浴室』シリーズを紹介し、日本美術史上の神田日勝の画業の位置づけについて解説しました。

学芸員による ギャラリー・トーク

6月29日 [参加者数]20名



『密室の絵画』と呼ばれた日本の戦後美術の代表的な作家について、日勝との連関を説明しました。

第十九回 馬の絵作品展

十月八日～十月十五日 鹿追町民ホール

応募総数は九四二点。今年は、親馬と仔馬、馬と人との触れ合いや、馬と地域文化との関わりを取り上げたものなど工夫した傾向がみられました。

入賞



北海道知事賞
札幌市立尾山野中学校2年
西谷 彰乃



北海道教育委員会教育長賞
北海道教育大学附属釧路中学校1年
牛木 乙帆



鹿追町長賞
北海道教育大学附属釧路中学校2年
青木 理緒



神田日勝記念美術館長賞
岩手市立風連中学校3年
粕谷 拓人



鹿追町教育委員会教育長賞
北海道教育大学附属釧路小学校4年
福土 太朗



北海道新聞社賞
北海道教育大学附属釧路小学校3年
福土 大陸



十勝道形サークル委員賞
鹿追町立上野内小学校5年
菊池 陸斗



JR北海道社長賞
遠野市立遠野北小学校(岩手県)1年
木元 小春



赤十字福祉社賞
鹿追町立瓜幕小学校6年
大久保 實



帯広市教育研究会工芸美術部会長賞
帯広市立松小学校4年
高橋 明日香



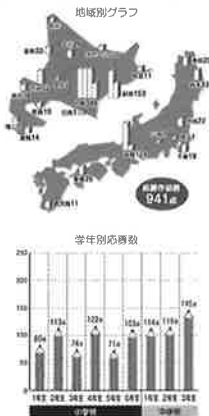
北海道電力帯広支店社長賞
函館市立高丘小学校2年
岡山 未侷



帯広信用金庫理事賞
小樽市立五子小学校6年
土屋 まい



文部科学大臣賞
北海道教育大学附属釧路中学校3年
平田 佳奈美



神田日勝 浅野修

生誕七十五年記念展

四月二十三日～五月二十六日
 神田日勝記念美術館 入館者数(一三三七六名)

十勝出身で主体美術を中心に活躍する現代美術家・浅野修の十勝の開拓の記憶を想起させる馬そりや馬具のオブジェなどで構成される「虚と実」シリーズの作品群と、神田日勝の「室内風景」などの代表作群による「コラボレーション」。

両美術家による「生誕七十五年記念展」。共に十勝の大地に根ざし、その風土性をそれぞれの方法で展開しています。



関連事業

「アートで世界とつながろう」

五月十二日 鹿追町民ホール
 (参加者数四十名)

浅野修氏を講師に、広く十勝管内からの参加者に加え、木材やダンボールの廃材などを活用して、さまざまな食へ物を製作しました。



ギャラリートークと フラメンコライブ

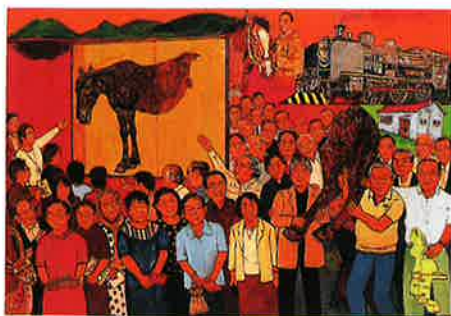
五月十九日
 神田日勝記念美術館・鹿追町民ホール
 (参加者数二〇名七十五名)



浅野修氏と美術評論家の赤津侃氏によるギャラリートークと、浅野香保里さんと小関博美さんによるフラメンコのミニライブを開催し、ともに盛況でした。

「斎藤吾朗展」

8月9日～8月18日
 鹿追町民ホール (来館者数1,273名)



独立美術協会を中心に制作している画家・斎藤吾朗は、故郷三河を題材に細密描写で独自の赤絵による世界を展開しています。「長滝の延年花奪い祭り」が当館へ寄贈され、それを記念して展覧会を開催しました。

錨をあげて ～独立美術の新しい潮流～

4月24日～5月12日
 鹿追町民ホール (来館者数886名)



神田日勝が作品を発表した独立展にちなみ、新しい世代の独立美術協会の作家で構成された展覧会を開催しました。

「田島征三絵本原画展」

十一月二十六日～十二月八日
 神田日勝記念美術館二階展示室
 入館者数(三四〇名)

絵本作家・田島征三(静岡県在住)の原画展を開催。初期の代表作「しばてん」「いろいろあってもあるきつづける」「やぎのしずか」の三作品計二十四点を展示。

田島氏は、一九六九年から東京・西多摩地区で自給自足的な生活を送りながら、創作を続け、ごみ処分場問題などの環境保護活動にも携わり、廃校をまるごと作品にしたり、木の実などの素材で作品を制作したりしています。

現在は伊豆半島に居住しながら、創作活動やワークショップ、絵本の読み聞かせなどの活動をしています。



十一月二十六日
 (神田日勝記念美術館)
 十四名
 (鹿追保育園)
 八十三名
 十一月二十七日
 (鹿追幼稚園)
 七十名

田島征三氏との懇談会・絵本の読み聞かせ

関連事業

ギャラリートーク

十一月二十五日
 神田日勝記念美術館
 (参加者数) 四十二名



五月二十六日
 札幌芸術の森美術館・北海道立近代美術館
 (参加人数) 三十五名
 「佐藤忠良展」(札幌芸術の森美術館)と「いわさきちひろ展」(北海道立近代美術館)を鑑賞。

芸術鑑賞 バスツアー



町民
 絵画展
 一月十六日～
 一月二十九日
 鹿追町民ホール
 鹿追に關係のあったことのある二十二名の絵画展。油絵やアクリル、水墨画などで、風景や静物、人物、抽象などさまざまなジャンルの力作が寄せられました。



第21回 馬耕忌

8月25日
鹿追町民ホール（参加人数）87名



「馬耕忌」は8月25日の、神田日勝の忌日開館二十周年記念式典と併せて実施されました。

館長鼎談では、佐藤友哉氏（札幌芸術の森美術館長）と萬崎由美子氏（HBC社長室広報部マネージャー）を迎え、「神田日勝記念美術館アラカルト」と題して美術館の20年を振り返り、田中光俊氏によるギター演奏も披露されました。

開館二十周年記念特別企画展

関連事業 記念講演会

講師 佐藤 友哉氏（札幌芸術の森美術館 館長）
演題 「壁その拮抗のはざまで〜戦後日本美術の段面」

三十五年前の北海道立近代美術館の「神田日勝展」に開いた当時の思い出から始まり、戦後の一九五〇〜六〇年代の美術状況と、神田日勝の画業の日本美術史への位置づけを、「壁」とその拮抗を軸に、展開されました。

日勝作品には壁が数多く描かれており、絵画空間を考えるときに壁を強く意識したのではないかと。それは、「密室の絵画」と呼ばれた戦後の新たな人間像表現をたどることによって明らかになされ、アンフォルメルも本質的には同じ出発点に立っているのではないかと。さらに、物質とイメージ、抽象と具象、その拮抗の中にどう調停させていくかという課題に日勝は立ち向かっていったのではないかと。このことを、作家や作品例、美術潮流も交えて展開し、最後に「馬（絶筆・未完）」も同様に描かれていることを述べて話を終えました。

第19回（開館記念祭）

蕪壺祭

6月17日
神田日勝記念美術館・
鹿追町民ホール
（参加人数）216名



あかねぐももの会により、月の沙漠、あさみの歌、すみれの花咲く頃、ケセラなどを女性三部合唱や男性クインテット、独唱など十一曲余を披露。最後のさようならは会場の来場者を交えた合唱になりました。

また町民ホールでは、恒例のワインとチーズに、友の会有志の手作りの山菜料理を加えた交流会と併せてアンコール演奏も行われました。

第11回（生誕祭）

日勝祭

12月8日
鹿追町民ホール・
神田日勝記念美術館
（参加人数）63名



神田日勝が暮らしていた笹川地域の方々による座談会。近隣に住んでいた渋川蔵氏、大槻八重氏、中野久子氏の三氏により日勝の子どもの時代の遊びや農作業の様子など、それぞれの思い出や印象が語られました。

展示室内でのミニコンサートでは鹿追高等学校校長の名平裕氏とA.L.T.のライアン・ハミルトン氏によるギターデュオ。交流会ではアンコール演奏も披露されました。

感想ノートより ②⑧

又泣けて困ります。酪農を離農地で始め、25年。苦しい牛飼いを閉じ、何もかもが重なり胸をしめつけます。馬も飼いました。賢くて、賢くて、あの目は忘れられません。数年振りに又来てしまいました。泣きに。日曜美術館で放映があったので、もっと混んでいるかと不安でしたが。又来ます。

2013.6.30 音更町 S.K.

神田日勝の人生と

作品には悟りの哲学があります。

痛みを持つ現代人を癒やす力を持っています。

私もそのように生きようと思います。

毎日、毎日～

新婚旅行の道すがら 韓国より 2013.7.10

偶然来ました。私もペニヤ板に描いてみよーっと。新聞紙のオブジェも作ってみよ。

8.11 千歳市 R.I

15年前苫小牧に住んでいて、3人の息子を連れてきて心ゆさぶられ、忘れられませんでした。

4才だった三男が馬の絵の前で立ちつくしていました。20才になった三男をまた絵の前に立たせたい…その想いで東京からやってきました。また15年後、絵の前に立ってほしいと願う美術館をあとにします。

8月 U

NHK Eテレ 日曜美術館で神田日勝、放映
(6/23、6/30 再放送9/1、9/8)

NHKのEテレの「日曜美術館」で「半身の馬 大地の画家・神田日勝」と題した特集番組が放映されました。信濃デッサン館・無言館の館主で作家である窪島誠一郎氏をゲストに迎え、関係者の貴重な証言を交えて、神田日勝の作品と生涯をたどる構成で、6月に2回、9月に再放送2回の計4回放映され、大きな反響を呼びました。

番組では、近隣の大槻八重さんは日勝に描いてもらった祖父母の遺影が大事にされていること、脇坂裕さんは日勝が全道展に入選したときに真っ赤なりんごを青年仲間に配ってくれたこと、画友の渡邊禎祥さんは日勝ら4人と写真を撮ったことや熱い美術論を交わしたこと、知人の高橋悦子さんは『室内風景』の男について、「自分を描いたの?」と尋ねると「うん」という返事が返ってきたなどのエピソードが語られました。



日勝が描いた大槻さんの祖父母の遺影。



斎藤吾朗「鹿追町の馬追人」



宮澤克忠「食・喰・舐・私欲・SHOCK」

寄贈作品紹介



新出紀久雄「幽遠・然別湖」

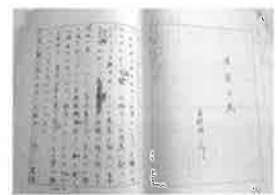


開館二十周年の記念グッズとして、神田日勝の「馬(絶筆 未完)」と美術館の外観をデザインしたクリアファイルの販売を開始しました。一冊二五〇円で美術館の窓口で取り扱っています。

クリアファイル

新発売

六月二十六日



高橋揆一郎元館長のご遺族から、神田日勝の生涯を描いた評伝「未完の馬」の草稿が当館に寄贈されました。自筆で至るところに朱書きが見られ、推敲のあとがうかがえます。

故高橋揆一郎の「未完の馬」評伝草稿寄贈

学校活用

鹿追小学校6年、3年、2年の社会科や生活科での見学や、笹川小学校をはじめ、瓜幕中学校、通明小学校の鑑賞授業が行われ、笹川・上幌内保育所が来館しました。

また、日勝の母校笹川小学校100周年記念式に協賛して日勝の作品の1日貸出、瓜幕中学校に当館所蔵作品を貸し出しました。



鹿追小3年



鹿追小2年



笹川・上幌内保育所

アート・キッズ・クラブ

5月18日～平成26年2月22日

鹿追町民ホール

[参加人数]小学生65名



今年も5月から翌年2月まで計8回実施し、リサイクル工作を中心にさまざまなものを製作しました。

支援するキッズ・ボランティアとして町内の方をはじめ有志他鹿追高校ボランティア同好会の生徒が登録し、協力しました。

子どもたちの工作に積極的に取り組む姿が印象的でした。なお製作したうちわ、モビール、マラカスを美術館や鹿追町民ホールに展示しました。

子ども芸術鑑賞ツアー

10月27日

北海道立帯広美術館・帯広市児童会館

[参加人数]22名

美術館では「もののけ姫」や「天空の城ラピュタ」などの背景画を描いた山本二三の



展示会を、児童会館では、科学展示室で体感展示を楽しみ、秋の星座とアニメーション「よだかの星」をプラネタリウムで鑑賞しました。



親子ワークショップ

11月23日 鹿追町民ホール

[講師]渋谷美江氏と仲間たち

[参加人数]51名



夢のお守りとしてインディアンに伝わるドリームキャッチャーを製作。柳の枝を輪にしたものにひもを蜘蛛の巣状に編み、羽毛やビーズで飾りました。

子どもワークショップ

夏



神田日勝の『室内風景』に何の食べ物をもち込む？

8月2日 鹿追町民ホール

[講師]吉野隆幸 [参加人数]10名

神田日勝の『室内風景』にちなみ、新聞紙で覆われた空間に、自分の好きな食べ物を紙ねんどや画用紙などで製作しました。

冬



鹿追焼きでユニークなペン立てを作ろう!

平成26年1月8日 陶芸工作館

[講師]陶芸工作館職員 [参加人数]17名

鹿追焼きでのペン立てづくりと併せて地元の粘土についてジオパークの職員から説明を受けました。

春



ビー玉コロガシを作って遊ぼう!

平成26年3月27日 鹿追町民ホール

[参加人数]26名

厚紙やペットボトルを活用して、ビー玉コロガシを製作。デザインを工夫したり音符の模様を付けたりしていました。